

助教、小典医となる。七〇—七六年ベルリン大学に留学。

陸軍軍医監(のち陸軍一等軍医正)、三等侍医(のち侍医局長)、東京医学校長を経て七七年初代東京医科大学総理、八八年日本最初の医学博士号を受ける。九八年男爵、一九〇二年宮中顧問官。戊辰、西南、日清の各戦争に従軍するなど各方面で活躍した。

文中 Antonius は Antonius、東京医科大学総理は東京大学医学部総理の誤である。

(大阪府豊中市 皮膚科開業)

E・ベルツの病理学総論講義 について

安井 広

E・ベルツは日本に来た一八七六年(明治九)から一〇年間東京大学で病理学を講義した。そのうち総論の内容をつたえるものに、学生のノートをもとにまとめて印刷したと思われる講本がある。この講本はずさんなものであるが、ほかに資料が見つからなかったためこれによった。

ベルツは病理学をワグネル教授に、内科学をウンデルリヒ教授に学んだ。時代背景としてウィルヒョウは一八五八年(安政五)に『細胞病理学』第一版を、一八七一年(明治四)に増訂第四版を著わし、その間一八六三年(文久三)に『病理腫瘍』を著わした。これらの著書はそれまでの病理観を大きく転換させた。またベルツが日本に来る前後から細菌学がめざましい発達をとげた。ベルツの講本が何年に印刷されたかわからないが、一〇年の間には講義内容も

変わって行ったに違いない。

講本の内容をみて行くことにする。

病理観 (一)液体病理学 (二)固体病理学 (三)細胞病理学

ワグネルは「細胞病理学がすべての病理学を包括すると考えるのは誤りで、病理学には血液や神経も器官の細胞と同様に重要である」と言っているが、当時はウィルヒョウの説にも誤りがあり、細胞病理学が全面的に認められていたわけではない。

すべての病気は初めは局所性であって、その病変のある所を「座」という。この局所病変がひろがると全身病となる。局所障害が明らかにされるにつれて全身病の数は少なくなるだろうと言っている。

全身病に三種ある。(一)悪液病 Dyskrasic 血液の組成が異常となったもの 例 白血病 黄疸 糖尿病(ワグネルの病理学書では血液病でこれらを扱っている) (二)中毒(ワグネルはマラリアもこれに属するだろうという) (三)感染接触伝染病、瘴気性伝染病と瘴気性接触性伝染病とがある。瘴気性伝染病は接触伝染せず、病原は患者体内にある間は伝染能力がなく、体外に出て発育増殖し、人に感染さす。この毒物を

瘴気毒といい、大気からの蒸発物(瘴気)の中にあつて伝染すると考えられていた。例 マラリア 脚気。

病原論 内因と外因に分ける。外因の中で特に日本人の衣食住を論じている。寄生虫病の記述が詳しいのに反し、細菌学は簡単である。

循環と栄養の障害 循環障害として心臓病、局所貧血、血栓症と塞栓症などが論じられる。ワグネルの著には全身性循環障害の章があるが、ベルツの講本にはない。

炎症と腫瘍とを栄養に関係づけているのはウィルヒョウの考えによる。

炎症の原因はつねに刺激であるとする。ワグネルが炎症をおこすために神経の影響を認めているのに対し、ベルツはこれを否定している。続いて渗出や化膿の過程を述べる。ウィルヒョウが膿球は局所の組織の細胞から生じたものであるとしたのを、コーンハイムが訂正してこれが白血球であることを実証したが、ワグネルもベルツもこの訂正説を採用している。

栄養不全による退行性変化に萎縮、変性、壊死をあげ、栄養過剰による再生、肥大、腫瘍を説く。

ウィルヒョウは病理解剖の上から肉芽組織に似る腫瘍形成の種類を包括して、肉芽腫瘍あるいは感染腫瘍といい、本来の腫瘍と区別して結核、癩、梅毒、狼瘡、鼻疽をあげた。ベルツもこれに従っているが、ワグネルにはこの名称はない。

本来の腫瘍について、ベルツはコーンハイムの迷芽説をとり、ウィルヒョウの刺激説を強くしりぞけている。

腫瘍を分類して (一) 結合織物質から発生するものに線維腫、粘液腫、血管腫、肉腫、神経膠腫などをあげ、(二) 上皮から癌腫 (三) 筋肉から筋腫 (四) 神経から神経腫 (五) いわゆる奇形腫に皮様囊腫をあげている。癌腫について「臨床上の考えから本来の上皮癌のほかにいわゆる結合織癌がある。上皮癌は最近知られるようになった」として (一) 上皮癌 (二) 内皮癌 (三) 結合織癌の三種を述べている。ベルツは結合織癌を肉腫と区別しがたいといい、ワグネルは結合織癌の厳密な組織学的独自性は存在しないと云っている。

最後に熱の項目がある。ワグネルは血液病の中でこれに多くのページを費して述べているが、ベルツは「かつては熱は独立した病気と見なされていたがこれは誤りである。

熱は症状であって病気そのものではない」と言っている。

(愛知県幡豆郡 開業)